都留文科大学研究紀要　第99集（2024年３月）
The Tsuru University Review,　No.99（March, 2024）

〈翻訳〉

全てが変わり、何も変わらない
― コロナ禍１年目におけるスペインとイタリアの移住農業労働ガバナンス ―

“Everything changes, everything stays the same”:
The governance of migrant labour in Spanish and Italian agriculture in the first year of the Covid-19 pandemic

ザカリア・サジール／ヨアン・モリネロ・ジェルボー／
ジェンナーロ・アヴァッローネ　著
上野　貴彦　　飯田　悠哉　訳

by SAJIR Zakaria, MOLINERO-GERBEAU Yoan
and AVALLONE Gennaro
Translated by UENO Takahiko, IIDA Yuya

要旨

新型コロナウイルスの大流行（パンデミック）に対する感染拡大防止措置は、食料サプライチェーンの安定を大きく脅かした。スペインとイタリアでは、パンデミック最初の数ヶ月で早くも農業労働力の不足が顕在化し、食料安全保障に移住農業労働者が不可欠なことが明らかになった。そこで本稿は、パンデミックが農業労働や移民に対する国民や政界の態度を変えることに貢献したのか、西伊両国での季節移住労働者や工業型農業をめぐる議論でいかなる認識が優勢だったかの２点を、批判的言説分析を中心に複数の分析手法を併用しながら検討する。具体的には、メディアにおける言説、関連する法律や行政の施策、２次統計データ、さらには移住農業労働者や労働組合がブログ、ウェブサイト、Facebookアカウントから発信する自己表象と提言を分析した。その結果、パンデミックで移住農業労働者の果たす重要な役割や労働搾取の実態が明るみに出たにもかかわらず、可視性の向上が具体的な政策や認識の転換に移行しなかったことが明らかになった。労働と資本の分離という擬制に問題の核心がある以上、資本の論理にもとづく欧州先進国経済の主要な議論において、移住農業労働者は周縁化されたままなのである。

訳者解題

本稿の概要

本稿は、スペイン高等学術研究院・人文社会科学研究所（CCHS-CSIC）の経済学・地理学・人口学研究所が刊行する学術誌『地理研究』に掲載された論文［Sajir, Z., Molinero-

Gerbeau, Y., & Avallone, G. (2022). “Todo cambia, todo sigue igual”. La gobernanza de la mano de obra migrante en la agricultura española e italiana en el primer año de la pandemia de COVID-19. *Estudios Geográficos*, 83(293), e114. https://doi.org/10.3989/estgeogr.2022120.120］の日本語訳である（日本語タイトルは訳者による）。

スペインとイタリアは、欧州で最初に新型コロナウイルスのパンデミックを経験し、保健衛生の面に限らず、社会・経済的な「危機」が欧州のなかで最も深刻化した国々である（上野 2020）。本論文は、こうした「危機」において浮き彫りになった、両国の農業と労働、そして人の移動の諸特徴を、パンデミック以前から継続している側面と、パンデミックにおいて新たに現れた側面の両方から捉え、分析するものである。

国境閉鎖措置を伴ったパンデミック危機は、国際的な移住労働に深く依存する欧州のアグリ・フードシステムの食料安全保障上の危機でもあった。この危機は、欧州の人々の日々の食生活がいかにEU圏内外からの外国人労働者によって支えられているか、にもかかわらず、いかにかれらが法的・経済的・社会的に脆弱な地位に留め置かれ、低賃金や過重労働、不衛生かつ狭小な居住環境や限定的な医療アクセスなど、劣悪な労働・生活条件に覆われてきたのか、いわば「エッセンシャルワークの逆説」（酒井 2021）的状況を人々の認識にのぼらせた。こうした状況にあって筆者らは、パンデミック最初の一年に両国で農業と移住労働をめぐって展開された、拮抗する政治的ナラティブを鮮やかに整理・分析してみせている。

そこでは、「全てが変わり、何もかわらない」というタイトルに示された、「危機」をめぐる情勢理解が導かれる。筆者らは一方ではパンデミックが契機となって、農業労働者の生活・労働の諸条件の改善や諸権利の保全を求めるナラティブがこれまで以上に聴衆を獲得するという、新たな機運が生まれたことに注目を促す。こうした機運はコロナ禍にあってもなお、社会的持続に不可欠な部門で働き続けている移住労働者の姿に脚光が当てられたことによるもので、この点で危機は新たな言説配置を生み出した。それらは、（左右から批判されてはきたが）イタリアで時限的な正規化措置が実施されるなど、いくつかの具体的な措置に結びついたことも確認される。

他方で筆者らは、両国で優勢であり続けたナラティブや政策措置は、本質的には危機的な状況にあって食料生産のための労働力を平時と変わらずに確保するという、功利主義的な態度のもとにあり続けたと分析する。移住労働者は数が揃えば権利と福祉を剥がれた状態でも良いという政治的態度、つまり「本質的に労働力であり、それも暫定的、一時的な労働力という過渡的な状態」（Sayad 2007: 50）としてのみ存在を許されるという、パンデミック以前からの政治的態度はここにおいて継続されてきた。その結果、移住労働者らの労働・生活諸条件の向上や感染リスク回避のための政策的措置は部分的にしか採られず、実際、農業労働者から多くの感染者が出ることに繋がった。

筆者らは、パンデミックで露呈したこれらの状況を、たんに農業という例外的な部門での例外的な例として資本主義社会一般から切り離し、その解決を一部門・一産地での労使問題に収斂させるべきではないとする。むしろ、筆者らが要請するのは、より広く資本主義と社会的公正や持続性の問題として、つまり「EU内のソーシャルダンピングや不公正競争といった核心的な問題」として、あるいは「資本と結びついた労働、急速に高齢化する社会といった、『私たち』の未来について」の議論の活性化であり、その重要な要素と

して農業・食料労働者らの生活・労働の諸条件と諸権利を位置づけていく議論である。あたかも労働問題などないかのように、欧州各地の農業経営者らが環境規制や農産物輸入に抗してデモを繰り広げている現状もまた、原著者らの指摘の重要性を浮き彫りにしている。以下では、こうした分析と結論に至る原著者らの問題意識を、環地中海農業と移民に関するかれらの研究蓄積の上に位置付けておきたい。

筆者らの研究について

原著者、とりわけスペインとイタリアにおける移住農業労働研究を牽引するヨアン・モリネロ・ジェルボー（教皇庁立コミージャス大学移民研究所常任研究員）やジェンナーロ・アヴァッローネ（サレルノ大学准教授）の研究全体の特徴として、農業における移住労働をめぐる問題を、ジェイソン・ムーアらが提唱する世界＝生態論（Moore 2015=2021）と接続することで、世界的な資本主義の趨勢に位置づけていることが挙げられる（例えばMolinero-Gerbeau 2020a=2023; Avallone 2017）。

むろん、農業・食料研究においては、移住労働を資本分析に結びつけるべきという呼びかけはこれまでもなされてきており（Sanderson 2012）、例えばフードレジーム分析に統合しようとする議論も存在してきた（e.g. Corrado 2017）。しかし特に英語圏の研究の場合、それらはあくまで、農業・食品産業部門の内部における資本と労働の関わりに収まる範囲での議論に過ぎなかった。

対して、ムーアらは世界＝生態論的観点からみた「安価な自然」、なかでも「安価な労働」と「安価な食料」を領有することこそが世界システム的な資本主義の再生産局面において重要な役割を果たしてきたと論じている（Moore 2015=2021）。筆者らはムーアらに依拠して、世界＝生態の中核における国々が経験している農業労働の「移民化」は「生産性の最大化に向けたフロンティアを開拓すると同時に、移民の低賃金に依存するかたちで、安価な食料を生産するための世界システムの一連の運動」であるとして、より包括的な視点を打ち出している（Molinero-Gerbeau 2020a=2023）。

原著者らの研究が有する視野の広さは、農業に注目しつつも、その他の領域に関しても調査・研究を継続していることからも来ると考えられる。かれらは、イタリアにおける非正規移民（無登録移民）の露天商に関する民族誌的調査も行ってきた（Molinero-Gerbeau & Avallone 2020; Sajir 2020）。とりわけ、本論文の筆頭著者であり、スペイン高等学術研究院・人文社会科学研究所（CCHS-CSIC）の研究員であるザカリア・サジールは、南欧とアフリカ諸国の関係を例に、モロッコからの「おとなの同伴者のいない青年移民（訳注2も参照）」に関するミクロな分析（Sajir 2020）から、通商や出入国管理をめぐって欧州とアフリカの国々が結ぶ二国間協定の性格について、世界＝生態論を用いつつマクロな分析をする論考（Sajir 2021）まで、多角的な研究を重ねている。

したがって、イタリア・スペイン固有の政治的・社会的ナラティブを仔細に分析する本稿にあっても、その背後には、世界＝生態としての資本主義にとって、今回のパンデミックがどのような危機であり、それはどのように乗り越えられようとしたのかという点について、欧州食料生産の中心地である両国での実際の現れ方から分析しようとする筆者らの姿勢を見出すことができる。だからこそ、本稿の締め括りにあっても、問題のフレームを「農業」という例外的な部門における個別の労使対立に還元して解決を見出そうとせず、より

構造的な問題把握と継続的・将来的な議論を呼びかけている。

日本との対比、あるいは接続

それでは、包括的な問題意識に支えられているとはいえ、環地中海の農業に特有の文脈に則した分析である本稿を、日本の読者はどのように受け取ればよいのであろうか。訳者としてはここで、コロナ禍での経験と本稿の内容を突き合わせて検討することを提案したい。

たとえば、本文中で言及される、スペイン南部アンダルシア州ウエルバで生産されるイチゴもまた、数年前まで日本でも大手コンビニエンスストア・チェーンが販売する冷凍イチゴに用いられていたように「身近」な存在である。さらに、同じ商品の原産地が今日ではモロッコに切り替わっていることは、グローバルに流通する食品をめぐる、価格や付加価値にかんする競争の熾烈さを物語っている。

コロナ禍での生活を思い起こしてみよう。移住労働者にその生産労働を依存するこれら「身近な」輸入生鮮食品は、大抵の国において国境が閉鎖され人々の移動が制限されたコロナ禍の最中にあっても品薄になることなく、相変わらずスーパーで買うことのできる身近な食品であり続けた。私たちはこれを当然に受け止めてきたが、本来的には不可思議なことのはずである。国際移動に生産過程の労働を大きく依拠したアグリ・フードチェーンは、あえていえばパンデミックによってもっと混乱に陥ってもおかしくなかったはずだ。本稿が示す生産地の状況、危機における労働動員の様相は、こうした不可思議さをめぐる問いの答え合わせの一面を持っているといえる。

さらに国内に目を向けるならば、イタリアやスペインと生産規模や工業化の度合いこそ異なるものの、日本の農業も技能実習というかたちで同程度に移住労働者に依存することで、その生産が成り立っている。そして、詳細は省くが、日本においてもまさに同様に、労働と生活の諸条件の改善に向けたというより、むしろ労働力としての数を埋めることを優先する措置が採られた。その結果、コロナ禍にあっても農業や食品製造業における外国人労働者は減らないばかりか増加すらした一方で、コロナ禍にあっても働き続けた実習生の労働と生活の諸条件は、コロナ以前と「あまり変わらな」かったとする報告がなされている（飯田 2021）。つまり、コロナ禍における移住労働者の経験は、それぞれの社会経済的背景が大きく異なるにもかかわらず、端的にいえば、よく似ていた可能性がある。こうした議論の妥当性は、今後、双方の研究者が比較検討を進めるなかでより詳しく検討されていくだろう。それは、双方を食料生産の「移民化」を経験している「中核」として括る原著者らの世界=生態論的視座の有効性をはかる作業にも連なる。

本論文の成果と課題

上述の通り、本論文はコロナ禍における農業や移民をめぐる世界的な動向を知る上でも、日本の状況と比較する上でも参照する価値の高いものである。しかし、あえてその限界を指摘するならば、「食料生産」労働を、農業に限定して狭く捉えすぎているという点を挙げることができる。包括的な原著者らの問題関心からすれば、コロナ禍で「ステイホーム」する人々の食の需要に応えるために、食肉・水産加工や調理食品などの食品工場、卸売市場やスーパー、あるいは急速に広まったウーバーイーツのような出前サービスなど、

「エッセンシャルサービス」とされたフードシステム全体において感染リスクのなかで働き続けた移住労働者らを検討の射程に収めても良いと考えられる。もっとも、こうした限界は本研究の価値を減じるものではなく、かつ、日本での研究についても同様に指摘されるべきことだろう。むしろ、今後の研究における発展可能性を示すものであり、相互参照と応答を通じた比較研究によって、一層の議論の深化が期待されていると言える。

The research leading to these results received funding from the NOSAGIO project（“Idénticas necesidades, modelos divergentes. La gestión de mano de obra agrícola migrante en España y Japón”）funded by Comillas Pontifical University（Project Reference: PP2022_12）.

キーワード：移住農業労働者、新型コロナウイルス（COVID-19）、季節移住、工業型農業、労働移動、正規化、社会的条件

1．はじめに

新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の感染拡大がもたらした危機は、人間の日常生活と食料生産、とりわけ欧州の農業生産とその移住労働の関わりの深さを、きわめて明確な形で浮き彫りにした。パンデミックの影響を最も早く受けたイタリアとスペインでは、ウイルスの拡散を抑えることを目的とした様々な措置や、ヨーロッパ全域の移動を妨げる国境閉鎖政策の実施にともない、パンデミックの本格化した2020年 3 月からわずか 2 週間で、農業とりわけ季節労働力の不足が表面化した。その結果、食料安全保障をめぐる危機がさけばれるに至った。

そこで本稿では、第 1 にパンデミックを通じた農業労働や移住に対する世論や政界における態度の変化、第 2 にパンデミック最初の 1 年間における、移住労働に関する人々の認識のあり方の検討を試みる。

本研究は、以下の 2 点を主目的とする。1 つ目は、イタリアとスペインの現政権と主要政党、ならびにEU諸機関が、農業労働に関して、パンデミックによって生じた新しい状況へのいかなる対応を模索したかを検討することである。こうした議論の詳細に迫ることで、パンデミックの発生初期に、外国人労働者の入国と雇用可能性を確保するためにどのような政策が提案されたかが明らかになる。それだけでなく、農業労働者の新しい権利、移民政策の新しいあり方、あるいは食料サプライチェーンの新しい形でのマネジメントを提案するような働きかけが、なにかしらの政治集団からあったかどうかも明らかにできる。本研究の第 2 の目的は、人の移動に対するどのような認識が公的・政治的議論において優勢であったかを、議論のなかで展開された主要な語り（ナラティブ）に注目しつつ検討することである。それにより、これらの認識が国家や国民社会の語りと利害を多分に反映したものであったのか、あるいは移住農業労働者の語りと利害が重要な役割を果たしたのかを検討することができる。

社会現象を観察し、記述し、理解するために用いられる言葉や語りは、中立たりえない。移民をめぐっては、その調査や理解において国家とその利害が長らく中心的な役割を果たしてきたため、なおさらのことである（Sayad 2007; Dahinden 2016も参照）。 こうした国

家中心のアプローチは、移民を、認識論的関係のなかで客体化してきた。他者によって決定される存在として移民を捉えてきた結果、移民自身の生、あるいは複数の主体・諸制度・諸力が絡み合うなかで決定される諸特徴を等閑に付してきた。

本稿の構成は以下の通りである。方法論的検討（第 2 節）ののち、パンデミック以前のイタリアとスペインにおける移住農業労働をめぐる状況を概観し、それが社会・経済構造において中心的位置を占めていながら、移住農業労働者たちが社会的・政治的に周縁化されてきたことに注目する（第 3 節）。そのうえで、パンデミックがイタリアとスペインの食料生産部門に与えた影響を、その最初の 1 年間、労働力不足が見込まれるなかで採用された政治的措置から検討する（第 4 節）。そして、イタリアとスペインにおける移住農業労働に関する社会的・政治的議論にみられた断絶の背景要因を検討する（第 5 節）。結論では、パンデミックにおける移民と農業労働の連関について得られた知見をまとめつつ、農業部門における労働搾取の可視化を、実際の政策や実践の変化につなげるための条件を検討する。

2．分析手法

本研究が用いる主たる研究手法は、批判的談話分析（CDA）である。これは主に、社会的・政治的に文脈づけられたテクストや会話において、社会的権力の濫用や不平等がどのように起こり、再生産され、正当化や抵抗の対象となるかを研究するために用いられる手法である（van Dijk 2015）。ただしこれは、単一の理論的アプローチに基づく画一的な方法論というよりは、会話やテクストがそれとなく間接的に伝える意味の研究を通じた社会変革に積極的かつ公然と関心を持つ、いわば「学術運動」（Baker et al. 2008）である。その目的は、言語の背後にある支配と抵抗の実践に焦点を当てることにより、最終的に言語によって実現、再生産、抵抗されることとなる体系的な社会的不平等をもたらす権力構造の諸側面を特定、解明、批判することにある（Gellen and Lowe 2020）。

ただし本稿は、批判的談話分析を基本に、分析対象であるパンデミック期間中に移住と農業労働の関連をめぐって展開された主な公的言説の特定、記述、解釈を試みるうえで、その他の研究手法を併用する。具体的には、公開済みの公式データを 2 次資料として用いての統計分析、マスメディアと専門的なメディアの体系的調査、スペイン、イタリアならびに欧州委員会が採用した関連法令・政令の調査、ならびに移住農業労働者団体や労働組合がウェブサイトやFacebookページを通じて行った自己表象と提言の分析である。

これらの手法を用いることで、移住農業労働者の労働・生活条件、パンデミックの被害に対処するための政策、さまざまな提案、公的あるいは水面下で、新型コロナウイルスの感染拡大に関する疫学的データとも関連しつつ展開・更新・変更されていった語りといったものを総合的に検証できる。また同時に、パンデミックのなかで示された様々な視点や語り（ナラティブ）を特定し、人の移動に関してEUやその加盟国がなした決定のみならず、イタリアやスペインにおける主要な農業雇用者団体や労働組合の見解からも直接影響を受けることとなった、移住農業労働者自身のニーズや意向を考慮することが可能となる。

上述の研究手法に基づき、本稿はまず、パンデミックによる保健・経済危機に対応し

て、欧州ならびにイタリア・スペインの国・地域・自治体レベルで行われた移住と農業労働に関する主な政策や取り組みの背景を把握する。次に、これらの公式文書に登場する主要なキーワードを抽出し、その政策領域を反映したテーマ別のカテゴリーに整理する（例えば、「EU」「農業省」「州政府」など）。最後に、これらのキーワードをもとに、2020年２月から2021年４月にかけて収集した文書、映像・音声資料から分析対象を選択した。

この分析の内容と結果を精査する前に、次節では、パンデミック以前のイタリアとスペインにおける移民と農業労働の関連について、詳細に検討する。

3．パンデミック以前のイタリアとスペインにおける移住農業労働をめぐる状況

スペインとイタリアは、農業部門の歴史的展開と移住労働者の雇用をめぐる過程が類似しており、比較可能性が高い（Molinero-Gerbeau and Avallone 2018）。農業は両国における経済の柱の一つであり、イタリア国立統計局（ISTAT）によれば、イタリアでは1960年代まで、スペインでは1970年代まで最大の雇用部門であった（Mata Romeu 2018）。また、生産形態も非常に類似しており、当時は自給自足的な収入確保と地場での販売回路を強く意識した家族経営の農業が主流だった。

しかし1970年代以降、第三次産業中心の国民経済への転換に付随するかたちで、工業型農業モデルが徐々に導入されるようになった（Pedreño Cánovas 1998）。

工業型農業は、畑をあたかも食品工場であるかのように転換する。フォーディスト生産様式を用い、温室や化学肥料の使用といった技術を導入することで、輸出向け生鮮食品の大量生産が可能となった（FitzSimmons 1986）。ただし、工業化農業への転換は急速に進んだわけではなく、欧州連合が誕生し、それを構成するスペインとイタリアが生果・野菜の主要生産地となった1990年代にようやく本格化した（Molinero-Gerbeau 2020a; Avallone y Ramírez Melgarejo 2017）。

工業型農業のおもな特徴のひとつは、家族の労働で事足りた伝統的農業とは対照的に、賃金労働が決定的に不可欠となることにある。ところが農村部は、より好条件の労働機会をより多く提供する都市部への労働力の流出によって過疎化しており、さらに農業労働は重労働かつ低賃金であることで知られ、魅力に欠ける（López-Sala 2016）。これらの要因が重なり、労働力の確保はたちまち困難になった。

こうした状況に直面したスペインやイタリアの農業生産者は、両国をめざす移民の増加に、この問題の解決策を見出した。外国人労働者、とりわけ非正規滞在者は、どんな仕事でも喜んで引き受けるからである。こうして、農業はすぐに、法的地位に関係なく仕事を探す多数の移民の「逃げ場」となった（Avallone 2017）。

時が経つにつれ、スペインでもイタリアでも、移住農業労働者の重要度が増していった。スペインの活動人口調査（Encuesta de Población Activa）によれば、過去10年のあいだに、農業労働者のうちの移住者の割合は20％にまで達している。イタリアでも同じ期間に、国立統計局（ISTAT）が移住労働者率の10％から18％への着実な増加を記録している（Molinero-Gerbeau 2020a）。移住労働は今日、人手不足と安価な食料生産という課題を確実に同時解決する手段として、両国の生産構造に埋め込まれているのである（Sajir 2021）。とりわけ、食料生産のコスト削減という点は決定的に重要である。新自由主義的なグローバル競争のもとで大規模流通業者が販売価格の決定権を持つ状況で（Garrapa

2018)、農業経営者が管理できる唯一のコストは労働に関するものだけなのである（Filhol 2013)。営利企業はこうした生産体制のもとで、仲介業者や最終的な買い手として、農産物の価格について農業生産者に対する強い発言力をもち、労働コストの切下げ圧力をもたらす。これは、販売価格の引き上げが困難ななかで、事業の収益性を担保する唯一の方法であると考えられている。ここで、移住労働を非正規な状態にとどめておくことが、以下の 2 つの目的にかなうこととなる。第 1 に、法的には働くことを認められていない非正規滞在者に職を提供することが魅力となり、労働力が確保できる。第 2 に、場合によっては法定最低賃金を下回るほどまで賃金を押し下げることで、生産上の収益性を確保できる（Molinero-Gerbeau and Avallone 2016)。

こうした構造的条件のもとで、スペインとイタリアの農業生産スキームにおける移民の編入はサバルタン的なものとなる。かれらの労働条件を特徴付けるのは、大多数の研究によれば、不安定性と搾取である（Rye and Scott 2018)。スペインとイタリアの経済だけでなく、EU全体にとっても重要な農業部門の存続に移住労働者が不可欠であるという事実と著しく矛盾するようにもみえる状況は、常により安価な食料を生産する能力が、資本主義の生産スキームの根底をなしていることを示している（Moore 2010)。

非正規移住労働をめぐる上述の論理は、スペインとイタリアの農業における生産モデルの基本的特徴をなすが、その帰結は両国で異なっている。

イタリアでは長らく、農業労働者における非正規滞在者の割合が高止まりしており、国立農業経済研究所の最も控えめな推計では労働者の12.2%（INEA 2014)、労働者職業訓練支援機関の推計では41.6%まで達する（ISFOL 2014)。同国では何度も移民の大規模な正規化が実施されてきたが、雇用契約の維持が滞在許可証を更新するための必須条件であるため、必ずしも移住者の生活環境の改善にはつながらない。雇用契約と滞在許可証の取得という最低限の法的要件を形式的に満たすことと引き換えに、法定最低賃金以下の報酬を受け入れなければならない労働のあり方は、「グレーワーク」（Avallone 2017）として知られている。ほとんどの外国人労働者は、永住権獲得を目指すため、そして事実上の代替となる雇用がないために、こうした条件を受け入れることとなる。結果として、こうした労働条件は農業分野の「労働基準」となり（De Castro 2014)、有効な滞在許可証を持っていても、他の外国人労働者と同じ低賃金水準を受け入れざるを得ない、東欧出身の労働者にも適用されていった。

スペインでも、常に一定の割合で非正規滞在者が雇用されてきた。しかし、1)「出身地契約（Contratación en Origen)」と呼ばれる、外国人労働者の集中する特定地域に限った季節移住労働プログラムの実施、2）東欧からの労働移民への依存度の高まりという 2 つの主要因が、非正規雇用を最小限に抑制してきた。季節移住労働プログラムは、農業の季節性が極めて高いウエルバ（アンダルシア州）とリェイダ（カタルーニャ州）の 2 県で主に実施され、農業労働を行うために第三国から労働者を短期間呼び寄せることを可能としている。雇用主は法定最低賃金を支払わなければならないものの、契約の開始時期と終了時期、ならびに毎日の労働時間、すなわち移住労働者の収入を決定できる。こうした高い柔軟性により、季節移住労働プログラムは、法律を遵守しつつも生産者に高い利益をもたらしていた（Molinero-Gerbeau 2020b)。

また、東欧（主にルーマニア）からの労働者の雇用による安定的・効率的で安価な労働

力の提供もあり、非正規移住労働者を大規模に雇用する必要はなかった。それでも過去20年にわたり[1]、特に東欧出身者や季節移住労働プログラムの労働力で生産需要をまかなうことができない場合に、補完的な労働力として非正規移住労働者が常に雇用されてきた（Márquez Domínguez and Gordo Márquez 2014）。

スペインとイタリアの文脈には差異もあるが、工業的産業農業が、安価な生産を保証する方法として、サバルタンとしての移住労働者の編入に大きく依存してきた点では共通している。こうして、移民はスペインやイタリア、そしてヨーロッパの経済において絶対的に不可欠な役割を果たす一方で、社会的疎外を強いられ、劣悪な労働条件のもとで働き、生活してきたという極めて逆説的な状況が生じてきた。

4．イタリアとスペインの食料生産部門におけるコロナ禍初期の影響

前述の労働条件や労使関係は、新型コロナウイルスの流行による保健衛生危機が両国の食料生産部門全体を混乱させるまでの20年間、基本的に変わらないままであった。

スペインにおける最初の外出制限が発せられたのは、おりしも、極度の貧困と人権に関する国連特別報告者であるフィリップ・アルストンが、約500人の移住農業労働者が暮らすウエルバのスラムを訪問してからわずか 1ヵ月後の 3 月14日であった。アルストンの訪問は、世界第 2 位のイチゴ生産地であるだけでなく、労働者に課せられた劣悪な労働条件や居住環境でも知られる、スペイン農業を象徴する農業集住地（Molinero-Gerbeau and Avallone 2018）における移住農業労働者の生活条件を調査するためのものであった。かれはスペイン訪問後の公式声明において、以下のように述べている。

> ウエルバの移民集住地区では、私が今までに世界で見てきたなかでも最悪の状況に匹敵する条件で暮らす労働者たちと会った。かれらは水を得るために何キロも移動する必要があり、電気も、十分な衛生設備もない状態で暮らしている。何年もそこに住んでいて、家賃を払う余裕がある人も多いが、誰も部屋を貸してくれないと言う。1 日30ユーロの収入しかなく、政府の支援はほとんど受けられない。ある人は、「仕事があれば、スペインは移民を必要とする。でも、私たちの生活環境には誰も興味を示さない」と話した。[中略]私がウエルバで観察した条件は、全くもって非人間的なものである（Alston 2020）。

この発言はメディアに大きく取り上げられ、農業移住労働者の待遇をめぐる公的な議論が盛り上がりをみせた。ところが、この訪問の数週間後に始まった新型コロナウイルスの流行が世論の注目をうばった。こうして季節労働者をめぐる問題は後景に退いたかにみえたのも束の間、今度は農業における労働力不足がすぐに国民的議論の俎上に乗ることとなった。

有効な滞在許可と労働許可を持つ農業移住労働者は、パンデミックに際して実施された感染拡大防止措置の直接の影響を受けなかった。最初に国民のほとんどに自宅隔離を課した 3 月14日の政令（Real Decreto 463/2020）では、かれらは「エッセンシャルワーカー」とみなされ、移動制限の影響を受けなかったからである（Ministerio de Trabajo y Economía Social 2020）。他方で、農業に従事する非正規労働者もスペイン全国で約 2 万人いた（Fanjul and Gálvez-Iniesta 2020）と推定されるのだが、かれらは労働条件を証明する書類を所持し

ていないために、職場に行くための許可が得られなかった。また、国境が世界的に閉鎖されたことで、東欧、あるいはスペインにおける季節農業移住労働プログラム参加者の主要出身国であるモロッコなどからの労働者の入国が完全に停止した（Molinero-Gerbeau 2020b）。こうした制限の結果、2020年にウエルバの農場で働くために来るはずだった約17,000名の労働者のうち、目的地に到着できたのはわずか約7,000名であった（Martín and Saiz 2020）。

国連特別報告者による発言の影響力が残っているうちに、農業労働者の集住地に住む非正規労働者は、仕事場に行くのに必要な法的書類を求めて、大規模な正規化を要求するための組織化を進めた。この正規化要求運動は、「#今すぐ正規化を（#RegularizaciónYa）」というハッシュタグとともに、瞬く間にさまざまな市民団体等からの支持を集めた。かれらの要求は、非正規滞在の放置が労働者たちのより不安定な状況を導く事態に終止符を打つとともに、農村部での労働者不足の解消に貢献する手段として、政府に正規化を呼びかけるものであった（#RegularizaciónYa 2020）。スペインはすでに1991年、1996年、2000年、2001年に大規模な正規化を実施していたため、この提案は非現実的なものではなかった（Molinero-Gerbeau 2020b）。スペイン政府当局の側もまた、イタリアの場合と同様、コロナ禍の最初期からこうした特別正規化の可能性を検討していた。

しかし、連立与党のひとつであるウニーダス・ポデモス（Unidas Podemos）を含む多くの社会的・政治的アクターからの圧力にもかかわらず、社会労働党が主導する政権は正規化を選択せず、2 つの代替措置によって労働力不足を解消しようとした。まず、欧州委員会が 3 月30日に発表した「労働者の自由移動に関するガイドライン」（2020/C 102 I/03）に従い、EU圏内からやってくる労働者に国境を開放した。スペインの農業に従事する外国人労働者の最大の送出国はルーマニアであり、例えば2009年から2018年の間に、大規模農業に特化したウエルバの生産地で働く労働力全体の40%から50%、リェイダで働く労働力全体の20%から30%がルーマニア人であった（Molinero-Gerbeau 2021b）。そのため政府は、ルーマニア出身者のスペインへの移動を可能にすれば、農業生産に必要な労働力を十分に確保できると考えた。

第 2 に、すでに国内に住む人々のうち、以下のふたつの状況に置かれた人々の動員を試みた。まず、（新型コロナウイルス感染以外の理由で）失業中の労働者に対し、社会給付の受給を継続したまま農業労働ができる、「財務省の補助金を受けた季節労働者」（Echevarría 2020）とすら呼ばれた働き方を提示した。また、おとなの同伴者のいない青年移民[2]（18歳から21歳）に対し、6 月30日まで（のちに 9 月30日まで延長）の農業労働許可証の取得可能性を提示した。

これらの例外規則が 4 月 7 日付の政令法（Real Decreto-Ley 13/2020）に盛り込まれたように、警戒態勢の発令からわずか 1 カ月の間に、政府は労働力不足を解消するための措置を矢継ぎ早に発動したのである。この動きは、移住労働者を「人間」ではなく、「資源」と認識する態度を如実に反映している。このように、農業部門におけるパンデミックへの対応は、とりわけ不安定な立場にある人々の状況を正規化したり、スラムに住む人々の労働・居住環境を改善することに焦点を当てるのではなく、いわゆる「移民をめぐる功利主義（migratory utilitarianism）」（Morice 2001）に根差し、労働力の確保だけに注力するものであった。

ところが、おそらくは期待通り労働力が確保できなかったため、5 月11日に政府は新たに内務省令（INT/401/2020）を発した。これは、14日間の隔離措置を受ければ、労働目的でのスペインへの入国を許可するというものであった。

その後、スペイン全体がいわゆる「新しい日常」に入るなかで、農業分野はパンデミック以前の活気を取り戻し、多くの非正規労働者が収入を得ることができるようになった。しかし、住居をめぐる危機的状況に対する行政の無策により、とりわけ過密住居に暮らす季節労働者の間で新型コロナウイルスの感染拡大が多発し、農業労働現場での感染対策の欠如が浮き彫りとなった。それから 1 年後にようやく、保健省が農業現場における新型コロナウイルスの予防と制御のためのガイドラインを作成したが（Ministerio de Sanidad 2021）、その他の目立った対策はとられなかった。その結果、一部の県で新型コロナウイルスが大流行し、20Aと呼ばれるCOVID-19の変異種を生み出したとすら推測されている。また、リェイダとウエスカ（アラゴン州）の農業労働者の間で発生したEU1変異種が、欧州大陸で新型コロナウイルス流行の第 2 波を引き起こしたと考えられている（Ansede 2020）。

リェイダ県では、2020年 5 月から 9 月にかけての農繁期に、路上や側溝、あるいは使われていない様々な建物が、寝場所のない労働者でごった返す一方で、宿泊施設はかれらの受け入れを拒否した（Burés 2020）。ムルシアでは 8 月 1 日、ニカラグア出身の労働者エセアサル・ベンハミン・ブランドン・エレラ（Eleazar Benjamín Blandón Herrera）が、過酷な労働のなかで死亡した。同様の問題は以前から存在したが、パンデミックの時期に認知度が高まったといえる。それでも残念ながら、構造的な変化をもたらすほどの騒動にはならなかった（Garcés Mascareñas and Güell 2020）。

労働力確保のために政府が採った様々な措置にもかかわらず、農業部門は雇用労働者数の大幅な減少に苦しんだ。スペインの活動人口調査によると、2019年から2020年にかけて、農業部門で雇用される外国人の数は 8 %減少し、2012年の水準に戻った。外国人において雇用数がより大きく減少していることは、2020年にスペインで農業作業を行うために来た人々に対して、移動制限が直接の影響を与えたことを示しているとみられる。

ただし、これらの統計データを解釈する際には、EU 対外国境が閉鎖されたことによる、欧州内部でのルーマニアやブルガリアからのEU労働者の獲得をめぐる「競争」の影響も考慮する必要がある。実際、ドイツの農村部に移住した東欧の労働者の数が多い（EURACTIV 2020）のは、EU 全体で労働力需要が高まるなか、東欧出身の労働者たちが、おそらくは出身国に近いうえに給与水準が高いことを理由に、スペインではなくドイツでの労働を選好したことを示唆する。

ほとんどの雇用主は、スペインで経済危機の影響が顕著になり、国内雇用促進のために季節移住労働プログラムが凍結された2008年と同様、スペイン出身の労働者に対する「プル」効果は機能しなかったと指摘している（López-Sala 2016）。スペインと労働者の出身国の双方で国境が突然閉鎖され、労働力の大部分が失われるというパンデミック特有の非常に不安定な状況は、雇用主にとって重大な懸念事項となった。そして、かれらはモルドヴァ、エクアドル、ホンジュラス、ウクライナ、ベラルーシといった新しい外国人労働者の代替供給源を検討するようになった（Landero 2020）。

その一方で、労働者の生活や社会的条件の改善に関して、政府は何の対策も実施しなかった。正規化プログラムは実施されず、おとなの同伴者のいない青年移民に与えられた雇用

許可は 6 ヶ月経たないうちに期限切れとなった。いまのところ、安全なシェルターの建設など、季節労働者が尊厳ある条件で生活できる環境づくりを支援する計画は存在しない。

イタリアとスペインの事例には多くの共通点があるが、当局の対応については部分的に異なっている。イタリアでは、パンデミックが始まった当初から、多くの雇用者団体や一部の政府関係者が夏季の労働力不足を懸念し、世論を喚起した。

関係者の中には、農業部門だけで20 ～ 40万人の労働者が必要になるとまで予想する者もいた（Misuraca 2020; Borrillo 2020; Camera dei deputati 2020）。このような予測に押され、政府は、農業における移民労働力の確保を目的としたいくつかの施策を採用した（Camera dei deputati, Servizio studi 2021）。これらの措置のひとつ、いわゆる「イタリア救済（Cura Italia）」政令（2020年 3 月17日承認）は27号法（2020年 4 月24日承認）に転換され、これにより2020年 2 月23日から 5 月31日までの間に失効する季節労働の滞在許可証の有効期限が、すべて2020年12月31日まで延長された。また、「復興令（Decreto Rilancio）」と呼ばれる34/2020法の第103条は、2019年10月31日以降に失効する滞在許可の一時更新（ 6 カ月間）と、農業とケア労働の 2 部門のみにおけるイタリア国民および外国人労働者における非正規雇用関係の正規化という、2 つの措置を可能とするものであった。また、季節労働者の欧州内での自由移動を認める先述のガイドライン群（European Commission 2020）が、イタリア政府による一連の措置を補完することとなった。そのほかにも、イタリア自営農民連盟（Confederazione Nazionale Coltivatori Diretti, Coldiretti）、イタリア農業総同盟（Confederazione Generale dell'Agricoltura Italiana, Confagricoltura）、イタリア農業連盟（Confederazione italiana agricoltori, Cia）といった雇用主組織も、労働力の需要と供給のマッチングを促進するための取り組みを実施した（CREA 2021）。

イタリア政府による、農業労働力不足を解消するための政策の実態については、多民族に関する研究・立案（ISMU）財団が調査を実施している。それによると、農場が正規化プログラムをほとんど利用しない状況について、雇用者団体は警鐘を鳴らしているという。調査責任者のマルタ・レガーリアによれば、イタリアの農村部では、国やEUが実施した様々な施策によって労働力不足をめぐる懸念が大きく緩和されたために、雇用主は労働者の地位を正規化する必要をほとんど感じていない（Regalia 2020）。

イタリア農業研究・経済分析評議会（CREA）による最新の調査も、同様の分析結果を示している。それによると、労働力、特に季節労働者の確保は、農業雇用者が最も重要視していない問題のひとつに入っており、かれらは主に、接客・飲食部門の売上減少、資金調達、輸出減、国境管理などを懸念している（CREA 2021: 86）。

ISMUとCREAによるインタビュー調査が示すように、イタリアの農業はパンデミックのなか、その最初の数ヶ月においてすら労働力不足を経験しなかった。2020年の農業における雇用数が2,4％しか減少していないというイタリア国立統計局（ISTAT）のデータも、このことを相当程度に裏付けるものである（Istat 2021）。

労働時間数については、2020年最初の 3 四半期、2019年の同時期と比較して約 3 ％減を記録している。これは重要な変化であるが、さほど深刻なものではない（ISTAT 2020: 17）。

労働日数に関しては、雇用数や労働時間の変化から推計できる値に比べ、実際の減少幅が小さくなっている（1.8％）。（未入手のデータによるものではあるが）イタリアの農業労働組合によると、この理由は、一部の農業労働者だけが、農業失業給付を受けられ

なくなるほどに労働日数を大幅に減らしたことを意味する（Arena 2021; Castelgrande and Melchionda 2021）。イタリア農業食品市場サービス研究所（ISMEA）による調査も同様の傾向を指摘しており、2020年第 2 四半期における第1次産業従事者数の減少幅（2.6%減少）が、イタリア全体の減少幅（3.6%減）よりも小さい（ISMEA 2020a）。ただし、2020年第 3 四半期の農業雇用者数が2.4%の増加をみせたことも、ISMEA の報告から明らかになっている（ISMEA 2020b）。

外国人農業労働力の国籍別構成からは、政府や欧州委員会による対策が、労働力不足の解消に有効だったことが分かる。外国人労働力は、主にルーマニアと一部の非EU諸国出身者で構成されている。イタリアの全国社会保障保険公社（INPS）によると、2019年末時点で、農業に従事する外国人労働者は約36万8000人で、そのうち55%を、ルーマニア（98,011人）、モロッコ（35,787人）、インド（35,355人）、アルバニア（33,568人）という 4 カ国の出身者が占めている（IDOS 2020）。

正規滞在しているEU域外出身労働者の雇用可能性については、2019年10月31日以降に期限切れとなる滞在許可証の更新で、おおむね解決されている。また、より柔軟な労働力への需要は、パンデミック中も続いた、インフォーマル形態の仲介を含む既存の採用慣行の継続と、正規化プログラムの開始によって満たされた（Caruso and Lo Cascio 2020）。

総じて、パンデミックの初年度における移住労働者の農業への就労機会は、わずかに減少したのみであった。このことは、イタリアにおける農業の産業構造に移住労働者が埋め込まれていることを示すとともに、国と地方自治体の労働政策が、有用性の基準によってのみ導かれたという事実を裏付けるものでもあった。ジョイア・タウロ平野（Redattore sociale 2020）やフォッジャ県（Tagliacozzo, Pisacane and Kilkey 2021）といった特定の農業集住地に焦点を当てた研究は、農業労働者の生活環境の悪化に注目している。フォッジャ県ボルゴ・メッツァノーネで働く労働者の黒焦げの遺体が粗末な掘立て小屋で発見されたことに象徴されるように、パンデミック最初の年にあっても、プーリアやカラブリア、シチリアといった地域で、移住農業労働者が住む農村部に「ゲットー」と呼ばれるような環境が存続していたのである（Ansa 2020）。そのほか、農業における搾取の範囲と強度がパンデミックによって軽減されなかったことについて、「新型コロナウイルスは搾取を止めるどころか、むしろ加速・複雑化し、移住労働者の生活・労働条件を悪化させた。しかし、この問題は非正規労働に対処することで解決できるものではなかった」（Omizzolo 2020: 292）と指摘する研究もある。

5．イタリアとスペインにおける移住農業労働をめぐる社会的・政治的議論

欧州では、どのような種類の移民を、どれくらいの数、どのような条件で、どれだけの期間、就労のために入国させるべきかをめぐる議論が続いてきた。その点において、パンデミック下でも、本質的には変わらない議論が展開してきたことになる。しかし、移民をめぐる今日の議論の形態そのものは、新型コロナウイルス・パンデミックの存在や性質と切ってもきれないものとなっている。本節で確認するとおり、1）議論のあり方を決定する要因となってきた、パンデミック下で展開した主要なナラティブ、2）議論を主導してきた社会・政治アクターの性質、3）結果として実施された取り組みや政策、の主に 3 点において、現在の社会的・政治的議論は過去のものと一線を画している。

パンデミック下の議論がそれまでのものと異なる第 1 の要因は、移民をめぐる議論が、労働、個人と社会全体の保健・公共の安全・国境管理といった既存の重要な問題に新しい解釈をもたらし、これまでも存在し続けていた問題を大きく取り上げるようになったことに関連している。こうした議論の再構成は、「新しい日常」、「労働力不足」、「労働搾取」、「エッセンシャルワーカー」、「輸送・労働・生活をめぐる条件」、「食料安全保障」といったキーワードを軸に、欧州および各国レベルでの多様な物語を生み出し、それが、パンデミックの最中におけるイタリアとスペインの移住農業労働に関する公的議論の輪郭を強く規定した。

新型コロナウイルス感染拡大危機による国境の閉鎖は、ヨーロッパ大陸全体における季節労働移動の重要性を浮き彫りにした。興味深いことに、農業部門における外国人労働者の重要性を説くナラティブを広めたのは、雇用者自身であった。このナラティブは、国境を開放すべきか閉鎖すべきかをめぐる二項対立ではなく、外国人労働者が高い経験とレジリエンスを有し、自国民労働者よりも低い賃金で雇うことができるために、国全体と第一次産業に経済的・戦略的利益をもたらすことに焦点を当てた。また、より限定的ながら、パンデミック後の国境閉鎖が、母国での仕事の見通しが立たない東欧の農村部出身者の多くにとっての季節労働の重要性を浮き彫りにした側面もあった（Edwards 2020）。

欧州レベルでは、別の主要なナラティブが同時進行で展開した。それは、季節移住労働者の重要性に対する人々の認識の高まりと、かれらをめぐる劣悪な生活・労働・健康状態の対比を押し出すものであった（Pedreño Cánovas 2020）。それは、トマス・マクファーソンの言葉を借りるならば、「政府は農業生産の継続を確保するためにかなり努力してきたが、こうした労働が不可欠であることを認識しながら、労働者を新型コロナウイルスから保護し、適正な労働条件を確保するための措置は極めて不十分である」というものである（MacPherson 2020）。後述するように、このナラティブの主な推進者は、労働運動家、労働者、労働組合であった。

皮肉にも、外国人労働者が「不可欠（エッセンシャル）」であることと、パンデミック下でかれらの健康状態が悪化したこととの関連は、移民がヨーロッパに「病気をもたらす」という使い古された言い回しとともに、外国人労働者を貶める形でも使われた。このスケープゴートをめぐるナラティブは、スペインよりもイタリアでより広まった。興味深いことに、社会的に望ましくないために水面下で拡散したこうしたナラティブは、移住労働者の証言を通じて明るみに出ることとなった。例えば、ジョイアタウロ平野（カラブリア）で働くアフリカ人労働者に関する事例研究においては、かれらが新型コロナウイルスの拡散の主因だと考える雇用主が、仕事の提供を拒否するという実態も明らかになっている（Camilli 2020）。スペインの場合、このナラティブは主にTwitterやFacebookなどのSNSや、WhatsAppなどのメッセージ・アプリケーションを通じて広がるフェイク・ニュースの形で展開した（たとえば、Ruiz Andrés and Sajir 2021を参照）。さらにイタリアでは、移民調査研究センター（IDOS）とコンフロンティ研究センター（Centro Studi Confronti）による共同研究（IDOS 2020）の結果が示すように、パンデミックとともに、スケープゴートを探そうとする人々による外国人憎悪や排外主義が実際に勢いを増している。

ここで注目すべきは、外国人季節労働者をめぐる脆弱性の増大と生活・労働条件の急激な悪化を人々が認識し、労働運動家や労働者による条件改善の努力がなされても、結局

は地方当局と使用者のあいだでの非難の応酬に翻弄されるかたちで責任の所在が曖昧になることが多い点である。「政府は労働者の権利の侵害について企業を非難する傾向があり、企業は逆に労働者の権利の行使を自分たちの義務ではなく、公的機関の義務であると考える傾向がある」という、極度の貧困と人権に関する国連特別報告者であるオリヴィエ・デ・シュッターの声明は、ナラティブの本質を捉えている（United Nations 2020）。こうした語りはスペインのみならずイタリアでも広まっており、第一次産業の使用者や、とりわけ市町村・地域（州）レベルの自治体当局によって定期的に再生産されている。

自国民労働者が農村部に「帰ってきた」というナラティブもまた、両国で展開した。とくにイタリアでは、これをめぐる国民と個人双方のレベルにおける成功譚が強調され、理想化された。さらには、農業部門の労働力不足と、他部門の失業率上昇を一挙に解決する、「イタリア方式」の対応策とまで言われるほど大いに称揚された。またこれが、「英国のために収穫しよう（Pick for Britain）」キャンペーンのように、国境を越えて他国に波及したとする議論もある（Horowitz 2020）。このナラティブは、貧困線以下で暮らす個人と家族を支援することを目的としたイタリア政府の補助金である「市民所得（Reddito di Cittadinanza）[3]」など、多くの施策と関連する形で展開した。

逆にスペインでは、「土仕事への回帰」のナラティブはより現実主義的な方向に展開し、愛国心や感傷的なものに転じることは稀であった。その結果、短期間だけ農業を体験してすぐに「逃亡」したスペイン人、農場における非人間的な労働条件をめぐって雇用主に対する正式な苦情申し立てを行うと決めた人、あるいは、スペイン国民のプロ意識の欠如や低い生産性に対する苦情を公に口にするスペイン人の雇用主などをめぐる失敗や不幸な結末は隠されるどころか、逆にナラティブの一部に組み込まれていった。

パンデミック下での移民と農業労働に関する議論がそれまでのものと異なる第 2 の要因は、パンデミックという非常事態が、議論に参加する社会的アクターの種類に変化をもたらすとともに、ロビー活動や社会運動にとって、前例のないほど様々な機会を与えたことである。

この意味で、新型コロナウイルスのパンデミックは、新たな要因と、既存の要因をないまぜにしながら、多数の重要な問題に関する社会的・政治的議論を一気に呼び起こしたといえる（Sajir and Ruiz Andrés 2020）。特に、移民と農業労働に関する議論は、古くから不平等、非正規移民、労働搾取、差別、ポピュリズム、人種差別といった要因を軸に展開してきた、「使い古された脚本にもとづく悲喜劇の再演」のようにも捉えられる。しかし「古い脚本」は、パンデミックが始まってから、季節労働者、トラック運転手、農業労働者といった、普段は議論の後景にとめおかれていた人々がアグロフードチェーンにおいて果たす重要な役割が明らかになり、そして、かれらの嗜好やニーズがより可視化されるなかで「再演」されていったのである。

イタリアでは、テレーザ・ベッラノーヴァ農務大臣が推進した、移住労働者に対する法的地位の正規化措置が議論の中心となった。皮肉なことに、いわゆる「復興政令（Decreto Rilancio）[4]」の一部に含まれたこの措置は、非常に異なる立場の人々から、様々な理由で強烈な批判を受けた。一方で、同大臣がパンデミック、特に非常事態を理由に政府に与えられた権限を利用して進歩的な政策を推進したと、連立政権内外の複数のポピュリズム運動勢力が批判した。他方で、イタリア最大の使用者団体であるイタリア自営農民連

盟（Coldiretti）も、正規化は緊急の労働力不足への対処法として適切ではないと批判した。さらには、労働組合、様々な非営利団体、そして当事者である外国人労働者からも、正規化プログラムが、長期的に農業労働者の権利を拡大することに純粋な関心があるというより、安価な労働力の供給確保によって経済的な緊急事態に対処することを目的とする、部門限定かつ一時的な措置であるとの指摘がなされた。

これを受け、移住農業労働者団体は、イタリアのアグロフードチェーンの歪みと復興令に対する異議を申し立てたうえで、ストライキを宣言して、1）住宅プログラム、2）尊厳ある給与水準、3）６ヶ月を超える滞在許可期間の延長と労働許可への転換可能性の確保を要求するとともに、4）果物や野菜の購入を一時的に控えることによって移住農業労働者への連帯を示すよう消費者に求めた（Il Fatto Quotidiano 2020）。

スペインでは、青年農業者組合（Asociación Agraria de Jóvenes Agricultores, ASAJA）、農業者・畜産業者協同組合連合体（Coordinadora de Organizaciones de Agricultores y Ganaderos, COAG）、小規模農業者・畜産業者組合（Unión de Pequeños Agricultores y Ganaderos, UPA）、農産協同組合（Cooperativa Agroalimentaria）、スペイン・ワイン生産者連合（Federación Española del Vino, FEV）、スペイン・ワイン製造企業組合（Asociación Empresarial de Vinos en España, AEVE）といった使用者団体が、大きな発言力を発揮した。これらの団体はパンデミックの発生当初から、欧州委員会に対して労働力不足の恐れと、それが農産物のサプライチェーン全体に及ぼす影響について警告し、加盟国と協力して緊急対応策を準備するよう呼びかけていた。また、スペイン労働省が労働査察を指示したことに関しても、使用者団体はこれを農業部門全体に対する「不当かつ自滅的な攻撃」であるとして強硬に反発した。

スペインの文脈においては、国連がもう一つの重要なアクターとなった。特に、2020年８月にアルメリアで雇用されている45名の移住農業労働者に対して実施した調査の結果に基づき、南スペインの移住労働者が直面している状況を「人間の悲劇」と呼んだ、極度の貧困と人権に関する国連特別報告者であるオリヴィエ・デ・シュッターの果たした役割が大きかった。この調査結果は、前任のフィリップ・アルストンがパンデミックの発生前に表明した見解を裏付けるものでもあった。デ・シュッターはスペイン当局に対し、移住農業労働者に適切な医療へのアクセスを含む、人間らしい（decent）、尊厳ある労働・居住環境を保障するため、早急に行動するよう勧告した。小保方友也（奴隷制の現代的形態に関する専門家）やバラクリシュナン・ラジャゴパール（適切な住宅に関する専門家）といった他の国連特別報告者も、この勧告を支持した（United Nations 2020）。

労働組合が中央政府と使用者団体にかけた圧力は、主に賃金の問題に照準しており、労働協約の違反や「みなし自営業者[5]」の悪用を争点化する一方、生活水準やパンデミックに関連した健康問題の改善にはあまり作用しなかった。また、スペインの２大ナショナルセンターのひとつである労働者委員会（Confederación Sindical de Comisiones Obreras, CCOO）は、アシエンダス・ビオ（Haciendas Bio）のような大企業がオーガニック認証を悪用しつつ、労働基準以下の条件を労働者に押し付けていることへの抗議にも注力した（Fernández 2020）。

パンデミック時に極めて重要な役割を果たした圧力団体として、ほかに「テンポレロス（temporeros、スペイン語で季節労働者の意）」がある。かれらの抗議行動は多岐にわたっ

た。たとえば、イチゴの収穫期が終了したのち、ウエルバでモロッコ人女性たちがデモを行い、帰国を可能にする人道的回廊の開設をモハメッド6世モロッコ国王に要請した。あるいは、「ウエルバの闘う日雇い女性労働者たち（Jornaleras de Huelva en Lucha）」という団体が、農業部門における女性労働者への差別と虐待を糾弾した。さらに、「#今すぐ正規化を（#RegularizaciónYa）」キャンペーンのスポークスパーソンであるセリーヌ・ママドゥ（Serigne Mamadou）や、アルメリアの温室で行われている搾取と虐待を暴露すべく、雇い主に秘密でビデオを撮影して証拠づくりをしたモロッコ人女性のように、農業部門に今も存在する劣悪な生活・労働条件を自ら暴露した、個々の労働者の取り組みもみられた。

欧州全域レベルでは、欧州委員会の、とりわけアディナ・ヴァレアン運輸担当委員が、パンデミック時に強い発言力を発揮した。2020年3月23日に、EU全体のサプライチェーンが円滑に運営されるように、「グリーンレーン」と呼ばれる国境通過を緊急に設ける必要性を表明するガイドラインを発表した（European Commission 2020a）。欧州委員会によるEU加盟国への圧力は続き、2020年3月末には、同委員会のヤヌス・ヴォイチェホフスキ農業担当委員が加盟国に向けて、「EUの食料安全保障に不可欠」な農業労働者の越境を促進する必要性についての勧告を発した（European Commission 2020b）。

パンデミック下の議論に特有の要因として最後に挙げられるのは、非常事態における政策決定スピードの加速である。これは事態への迅速な対応には有効であったが、制度に対する信頼や、行政権と立法権のバランスが損なわれた。そのため特にスペインでは、中央政府と地方政府の間で、頻繁に緊張が生じた。

セバダ・ロメロらが指摘するように、保健衛生危機は、パンデミックへの対応の有効性は人的・財政的資源の多寡だけでなく、危機に立ち向かう際のガバナンスの優劣や、法的枠組みにも依存することを明らかにした（Cebada Romero and Dominguez Redondo 2021）。優れた民主的ガバナンスの基礎原理のうちでも代表的なものとされるのが三権分立であるが、パンデミックは、イタリアやスペインのように民主主義が確立している国でも、この原則にひずみを生じさせた。行政府が緊急法制定権を発動し、パンデミックによる混乱に対して欧州、国、地域レベルで迅速な対応を確立する上で極めて重要な役割を果たしたためである。

非常事態が長期化するなか、イタリアやスペインの野党の果たす役割は、必然的に以前より小さくなった。それはまず、農業分野における労働と移民に関する社会的・政治的議論を形成する機会が減り、さらにはパンデミックに対応する政策や法律の策定に参画する機会が減ったためである。そのなか、スペインとイタリアの双方で、1）いわゆる「グリーンレーン」を設定したり、非常事態宣言を緩和することで農業労働者の自由な移動を促進すること、2）感染拡大の温床が特定された場合に、そこからのウイルス拡散を抑制するための「レッドゾーン」を設定すること、3）農業部門での雇用を促進するための職業斡旋プラットフォームを創設したり、その他のインセンティブを創出すること、4）農業部門における「カポララート[6]」、「農業マフィア」、外国人労働者の搾取といった現象の広がりを防ぐための査察・検挙の実施という、4つの異なる中心的争点が浮上した。

欧州レベルでは、6月19日に欧州議会が「越境および季節労働者の欧州レベルでの保護（European protection of cross-border and seasonal workers）」という決議を採択し、欧州委員会に対し、悪質な下請け慣行の撲滅に取り組み、下請けやサプライチェーンで働

く季節労働者や越境労働者を保護するための長期的解決策の提示を求めたことが契機となった。欧州委員会はこの要請にこたえ、パンデミック発生直後に発表した「新型コロナウイルス（COVID-19）の流行状況におけるEU内の季節労働者に関するガイドライン（Guidelines on Seasonal Workers in the EU in the Context of the COVID-19 Outbreak）」を補完する形で、「新型コロナウイルス（COVID-19）流行下の労働者の自由移動の行使に関するガイドライン（Guidelines concerning the exercise of the free movement of workers during COVID-19 outbreak）」を発表した。この文書を通じて、欧州委員会は、1）農業部門の季節労働者は必要不可欠な機能を果たしているため、自由な移動の制限から除外されることを再確認し、2）季節労働者に影響を与える労働安全衛生（OSH）要件に対する認識を高め、雇用者と季節労働者に向けた啓発運動に取り組むよう加盟国に呼びかけるとともに、3）季節労働者の労働・生活条件を改善するための各種措置を実施することを約束した。

6．結　論

「今年、新型コロナウイルス危機により、システムのほころびが露呈した」

── ギジェルモ・アブリル（Abril 2020）

新型コロナウイルスの感染拡大は、ヨーロッパの分節化された労働市場における、搾取的な労働条件を浮き彫りにした。また時にそれを悪化させ、農業部門の機能不全をより顕著に示した（Goméz 2021）。こうしたことは、ギリシャやスペイン、イタリアのように大規模なインフォーマルセクター、弱い労働組合、二重労働市場を持つ国だけでなく、ドイツのように経済のインフォーマル性がかなり低い国でも起こったことである（Edwards 2020）。

実際、パンデミックは、先進諸国とされる欧州の経済を成り立たせている矛盾、誤解、内面化された偽善といったものを深く分析する上で有用な、いくつかの貴重な教訓を残している。

ヨーロッパの先進国は、経済成長とイノベーションを刺激するために、選りすぐりの熟練移民を呼び込もうと互いに競争している。しかし他方で、非熟練労働に大きく依存し続けているだけでなく、非熟練労働者を奪い合ってもいる。

過去30年間、経済自由化の過程が生み出した労働構造と組織は、安価かつ使い捨て可能で、柔軟で、死に物狂いで働くしかない労働力を必要とする。こうした労働力は、経済的側面だけでなく、社会における象徴的側面、さらには法や政治といった諸側面においてもサバルタン的な役割に追いやられ、最終的には、「社会的には排除され、法的には脆弱で、政治的には無意味」な状態に置かれる（Pietrogiovanni 2020）。

したがって、パンデミックの最初の教訓は、農業、介護労働、接客業などの部門は、安価な労働力が絶えず入ってくることによってのみ存在し続け、競争力を維持することができるということである。パンデミックは、国際移住労働力にますます依存するようになったイタリアとスペインの農業の姿を浮き彫りにした。農業移住労働者が「不可欠」（Pécoud 2020）であるということを、（ほぼ）誰もが認識せざるを得なくなり、かれらは医療従事者と同じように「英雄」とまで称された（Secretariat of State for Global Spain 2020）。

この点において、パンデミックはヨーロッパ先進国経済の内部矛盾を露呈した。利益と競争力を追求するために、移住労働者をより柔軟に採用できるようにして経済を自由化したいと考えつつ、移民をより少なくすることはできないのである（Edwards 2020）。

ただし、パンデミックが農業分野における移住労働者の可視性を高めることに貢献したにもかかわらず、かれらの存在を隠蔽し無視するという暗黙の傾向は、依然として続いている。ヨーロッパの先進国経済のまさに中心に、安価な労働力の輸入に特化した農業ビジネスがある。このことは何も目新しいことではないが、それが統合欧州プロジェクトの基本的な特徴をなしていることについて、公論が展開されることはほとんどない。パンデミックは、専門化した人材派遣会社やEUレベルでの制度化が、ここ数十年のあいだ業界に与えてきた正統性を、わずかに揺るがしたにすぎない（Poenaru and Rogozanu 2020）。

パンデミックは、農業における労働が、1939年にシリル・ライオネル・ロバート・ジェームズが定義した「従順な黒人の神話」を大いに想起させるような、事実を含みつつも歪んだステレオタイプに基づいた、移住労働者のイメージに支配されていることを確認させた（Johnson 1939）。これは主に、スペインとイタリアにおける正規化プログラムに関する議論のなかで構築されたナラティブにおける、自らの必要や意向を持つ主体ではなく、受動的な犠牲者としての移住労働者像にみられる。これが暗示するのは、移住労働者は国民経済に有用である場合に限って、権利を行使するに値するという考えである（Pietrogiovanni 2020）。これは、アブデルマレク・サイヤードによれば、移民があくまで労働力と同一視されていることを明らかにするものであり、それゆえ、かれらの存在を完全な形で正統化できるのは、ただ仕事のみなのである。言い換えれば、「移民は本質的に労働力であり、それも暫定的、一時的な労働力という過渡的な状態」ということになる（Sayad 2007: 50）。

移住農業労働者の貢献が可視化されても、そのことは人々のかれらに対する政治的態度を変えるには十分ではなかった（Ramírez Melgarejo 2020）。それどころか、かれらを必要不可欠な労働力として位置付けることは、費用対効果のバランスから移民を捉える、功利主義的な態度を際立たせることにしか寄与しなかった（Morice 2001）。

移住労働者の個人的・集団的な苦しみや悲劇が可視化され、ヨーロッパの近代的かつ民主的で豊かな国々のアグロフードチェーンの存続に不可欠な貢献が認識されても、政策や取り組みにおける変化にはつながらなかった。このような可視性の向上は、労働の論理と資本の論理の架空の対比の中で展開されるのだが、マルクスが指摘したとおり、「労働と資本は同じ関係を指す表現であり、それをただ対極から見ただけのもの」なのである[7]（Marx 1971: 491）。労働と資本の関係全体を見通すような大きな物語だけが、両者の偽りの対立を克服し、パンデミック下で一時的に脚光を浴びた、移住労働者をめぐる悲惨な状況とかれらの経済的貢献を、実際の変化に繋げることができるだろう。そのために必要なのは、その場しのぎで部分的な施策ではなく、普遍的な政策である。

農業部門における搾取をめぐるナラティブは、それがあたかも資本主義システムの他の部分とは切り離されているかのような、壮大な幻想の中で展開される。このナラティブが活性化し再生産されるのは、移住労働者が、みずからをめぐる個人的・集団的な劇的状況を公に説明する機会を与えられたときである。あるいは労働組合が、労働協約に定められた最低賃金を尊重しない使用者団体を糾弾し、移住労働者を支援するときである。

しかし、このナラティブを通じた農業労働の構造的な変革は不可能である。なぜなら、単なる移住労働者の問題、あるいは、一方に労働組合、他方に使用者団体がおり、それを地方当局が仲介している闘争の次元に閉じ込められてしまうからである。問題の核心から人為的に切り離されたままでは、（パンデミックの初期に一時的にだけ実現したような）社会問題としてのフレーミングをするだけの、十分な関心を集めることができない。

じつは目新しいことなど、ほとんどない。問題の大枠は以前から知られており、パンデミックは、私たちがかつて「日常」と呼んでいた状態の、機能不全に光を当てただけであった（Molinero-Gerbeau 2021a）。一般に、移住労働者が派遣会社や搾取的な仲介の慣行を通じて雇用されている場合も、「みなし自営業」の地位を甘受している場合も、かれらの雇用、住居、労働条件は救いようがないほど嘆かわしいものである。この嘆かわしい状況は、欧州加盟国間の搾取、ソーシャルダンピング、不公正な競争の原因であるとともに、その帰結でもある（EFFAT 2020）。

欧州連合の共通農業政策（CAP）は、大陸欧州における安定的な食料供給のために策定され、60年間にわたって農家を支援し、農業生産性を向上させることを最優先事項としてきた。補助金は農家の規模や環境対策によって増減するものの、労働条件に関する要件はない。そのため、緑の党のダニエル・フロイント（Daniel Freund）議員が指摘するように、動物や自然環境に対する保護の方が、農場で働く人々に対する保護よりも手厚いという不条理が生じている。

農場がどれほどの人々に雇用を提供しているかだけが重要なのではない。その人々がどのような扱いを受けているのか。かれらの賃金は適正か。最低賃金は支払われているのか。こうした問題はこれまで、他にも多くの問題が山積するなかで、農業政策においてほぼ無視されてきた（Borges 2020）。

パンデミックは、こうした搾取の形態をめぐる、ヨーロッパ大陸全体における可視性を高めた。しかし、こうした問題は、移民や労働に関する議論において、まだ中心的な役割を果たすには至っていない。むしろ逆に、資本をめぐる、とりわけEU内のソーシャルダンピングや不公正な競争といった核心的な問題からは、依然として切り離されている。今日に至るまで、農業部門の労働者の権利とその生活・労働条件がEUの農業補助金制度においてさえ言及されていないという事実は、欧州レベルでの移住農業労働の議論が周縁的なものにとどまっていることを証明している。

この点に関して、最近、欧州食品・農業・観光労働組合連合（EFFAT）が300以上の団体や個人と共同で実施した取り組みは、変革への期待をもたせるものである。これは、各国の農相、欧州委員会、欧州議会に対し、補助金の直接支払い条件にILO条約やEU法、国内法ならびに関連労働協約に規定された労働・雇用条件の尊重という「社会的制約条件メカニズム（social conditionality mechanism）」を含めた、新しい共通農業政策（CAP）を取り決めることを要請するものであった（EFFAT 2021）。

また、各国レベルでは、労働と資本が再統合されなければならない。つまり、近年の農業部門における労働搾取とそれが野放図にされている問題のあり方は、スペインやイタリアなどの国々で大きな問題となっている脱税とそれに伴う国家財政の損失という問題と密接に関わっており、そのことが公的かつ恒久的に認められなければ、事態の改善にはつながらないのである（Fernandez 2020）。

したがって、パンデミックの教訓を政策や取り組みの変革につなげることができるかどうかが、重要な問題となる。マルタ・フォレスティは、パンデミックが、移民と農業労働の政治についての新しい議論の機会を作ったという見方を示している（Foresti 2020）。そこで、移住が良いか悪いか、あるいは国境を閉じるべきか開くべきかということばかりを論じることは避けるべきである（Shachar 2020）。代わりに、資本と結びついた労働、急速に高齢化する社会といった、「私たちの」未来について議論すべきであろう。果物を収穫する人々、看護に携わる人々、そして清掃員、運転手、介護労働者といった人々を必要とする経済について議論が必要であろう。そうした人々がどこから来たかにかかわらず。

註

1　季節移住労働プログラム、ならびに欧州連合の東方拡大が開始してからの約20年を指す。

2　主に北アフリカやサブサハラ・アフリカから地中海国境を単身で越境してきた青年移住者のうち、とりわけ未成年者はスペイン語でMenas（menores no acompañados/as）などと呼ばれ、しばしば社会的排除やスティグマ化の対象となってきた。スペインのジャーナリストによる描写（Abril & Spottorno 2017=2019: 23）も参照。

3　パンデミック発生前の、2019年1月に創設された最低所得保障制度。

4　正式名称は、「新型コロナウイルス感染症による疫学上の非常事態に関する、保健および雇用・経済支援、ならびに社会政策分野における緊急措置（Misure urgenti in materia di salute, sostegno al lavoro e all'economia, nonché di politiche sociali, connesse all'emergenza epidemiologica da COVID-19）」

5　スペインの社会保障制度に設定された自営業者特別制度（RETA）に、会社と雇用関係にある従業員を自営業者に偽装して組み込む、違法な雇用形態。会社が負担すべき社会保険料等の諸費用が節減できる。

6　イタリア語で、犯罪者集団の「親分」を指す「カポラーレ（caporale）」から派生した用語。主に農業における違法な仲介行為を指す。

7　なお、大島清・時永淑訳（Marx =1963-66: 633）では以下のように訳出されている。「賃労働としての労働と、資本としての――したがってまた資本家の所有物としての――労働条件とは、同じ関係の表現であって、ただそれを違った極から見たものにすぎない。」

参考文献

Abril, G. (2020). Jornaleros de la pandemia. *El País Semanal*. Retrieved from https://elpais.com/elpais/2020/07/08/eps/1594218155_607566.html

Alston, P. (2020). Statement by Professor Philip Alston, United Nations Special Rapporteur on extreme poverty and human rights, on his visit to Spain, 27 January – 7 February 2020. Geneva: OHCHR. Retrieved from https://www. ohchr.org/en/NewsEvents/Pages/DisplayNews.aspx?NewsID=25524&LangID=E

Ansa (2020). 37-year-old migrant dies in Foggia shanty town fire. Ansa. Retrieved from https://www.infomigrants.net/en/post/25394/37-year-old-migrant-dies-in-foggia-shanty-town-fire.

Ansede (2020). Una nueva variante del coronavirus detectada en junio en España ya es una de las más frecuentes en Europa. *El País*. Retrieved from https://elpais.com/ciencia/2020-10-29/una-nueva-variante-del-coronavirus-detectada-en-junio-en-espana-ya-es-una-de-las-mas-frecuentes-en-europa.html

Avallone, G. (2017). *Sfruttamento e resistenze. Migrazioni e agricoltura in Europa, Italia, Piana del Sele*. Verona, Italy: Ombre Corte.

Avallone, G. and Ramírez Melgarejo, A. (2017). Trabajo vivo, tecnología y agricultura en el Sur de Europa. Una comparación entre la Piana del Sele en Salerno (Italia) y la Vega Alta del Segura en Murcia (España), *Ager. Revista de Estudios sobre Despoblación y Desarrollo Rural*, 23, 131-161.

Arena, C. (2021). La protesta. «Lavoratori agricoli lasciati senza sostegni», *Avvenire*. Retrieved from https://www.avvenire.it/economia/pagine/lavoratori-agricoli-lasciati-senza-sostegni.

Baker, P., Gabrielatos, C., Khosravinik, M., Krzyżanowski, M., McEnery, T., & Wodak, R. (2008). A useful methodological synergy? Combining critical discourse analysis and corpus linguistics to examine discourses of refugees and asylum seekers in the UK press. *Discourse & Society*, 19(3), 273-306.

Borges, A. (2020). Trabajadores invisibles: la explotación laboral en los campos europeos. *Euronews*. Retrieved from https://es.euronews. com/2020/07/17/la-explotacion-laboral-en-los-campos-europeos-en-el-punto-de-mira?s=09

Borrillo, M. (2020). Braccianti, tutti i numeri degli irregolari. Gli «invisibili» e i 240 mila italiani senza sussidio. *Corriere della sera*. Retrieved from https://www.corriere.it/economia/lavoro/cards/ braccianti-tutti-numeri-irregolari-240-mila-italiani-sarebbero-gia-disponibili/i-200-mila-braccianti-mancanti-secondo-associazioni.shtml

Burés, E. (2020). Temporeros duermen en las calles de Lleida durante la crisis sanitaria. Crónica Global. Retrieved from https://cronicaglobal.elespanol. com/vida/temporeros-duermen-calles-lleida_352968_102.html

Camera dei deputati (2020). Resoconto stenografico dell'Assemblea. Seduta n. 327 di giovedì 16 aprile 2020. Roma: Camera dei deputati. Retrieved from https://www.camera.it/leg18/410?idSeduta=032 7&tipo=stenografico

Camera dei deputati. Servizio studi (2021). Il settore agricolo e della pesca di fronte all'emergenza COVID-19. Roma: Camera dei deputati. Retrieved from https://www.camera.it/temiap/documentazione/temi/pdf/1211145.pdf?_1585711022073.

Camilli, A. (2020). L'emergenza coronavirus tra i braccianti di Rosarno. *Internazionale*. Retrieved from https://www.internazionale.it/reportage/annalisa-camilli/2020/10/23/zona-rossa-tendopoli-rosarno

Caruso, F. and Lo Cascio, M. (2020). Invisibili, ma indispensabili: l'emersione tra i braccianti nel Sud Italia. En L. Cigna. (Ed.), *Forza Lavoro! Ripensare il lavoro al tempo della pandemia* (pp. 69-80). Milan: Fondazione Giangiacomo Feltrinelli.

Castelgrande, F. and Melchionda, G. (2021). Con la pandemia aumentato lo sfruttamento dei braccianti agricoli. *Basilicata24*. Retrieved from https:// www.basilicata24.it/2021/04/con-la-

pandemia-aumentato-lo-sfruttamento-dei-braccianti-agri-coli-95646/.

Cebada Romero, A., Dominguez Redondo, E. (2021). One Pandemic and Two Versions of the State of Alarm, *Verfassungsblog: On Matters Constitutional*, 2021/2/26. https://doi.org/10.17176/20210226-154142-0

CREA (2021). Annuario dell'agricoltura italiana vol. LXXII. Retrieved from https://www.crea.gov.it/documents/20126/0/CREA_Annuar-io_2019+%281%29.pdf/90ed3cae-d0da-f42e434a-9b10a8d6a512?t=1611309855319

Dahinden, J. (2016). A plea for the 'de-migranticization' of research on migration and integration. *Ethnic and Racial Studies*. http://dx.doi.org/10.1 080/01419870.2015.1124129.

De Castro, C. (2014). La desdemocratización de las relaciones laborales en los enclaves globales de producción agrícola. En A. Pedreño Cánovas (Ed.), *De cadenas, migrantes y jornaleros. Los territorios rurales en las cadenas globales agroalimentarias* (pp.59-77). Madrid, Spain: Talasa.

Echevarría, P. (2020). El decreto de ayuda al sector agrícola no regularizará a jornaleros migrantes 'sinpapeles'. *La Mar de Onuba*. Retrieved from http:// revista.lamardeonuba.es/la-regularizacion-que-no-llego-jarro-de-agua-fria-sobre-de-miles-de-migrantes-sin-papeles/

Edwards, M. (2020). Fruit picking in a pandemic: Europe's precarious migrant workers. *Global Voices*. Retrieved from https://globalvoices. org/2020/07/14/fruit-picking-in-a-pandemic-europes-precarious-migrant-workers/

EFFAT (2021). The New Cap Needs Social Conditionality. End exploitation and raise labour standards in European agriculture. European Federation of Trade Unions in the Food, Agriculture, and Tourism. Retrieved from https://effat.org/open-letter/

EFFAT (2020). EFFAT meat sector report: poor conditions to blame for spread of Covid-19. European Federation of Trade Unions in the Food, Agriculture, and Tourism. Retrieved from https://effat.org/in-the-spotlight/effat-meat-sector-report-poor-conditions-to-blame-for-spread-of-covid-19/

Euractiv (2020). Germany relaxes restrictions on seasonal workers. *EURACTIV*. Retrieved from https:// www.euractiv.com/section/economy-jobs/news/ germany-relaxes-restrictions-on-seasonal-workers/

European Commission (2020a). Coronavirus: Commission presents practical guidance to ensure continuous flow of goods across EU via green lanes. European Commission. Retrieved from https:// ec.europa.eu/commission/presscorner/detail/en/IP_20_510

European Commission (2020b). Coronavirus: seasonal workers included in new guidelines to ensure free movement of critical workers. European Commission. Retrieved from https:// ec.europa.eu/info/ news/coronavirus-seasonal-workers-included-new-guidelines-ensure-free-movement-critical-workers-2020-marzo-30_en

Fanjul, G., & Gálvez-Iniesta, I. (2020). Extranjeros, sin papeles e imprescindibles: Una fotografía de la inmigración irregular en España. Madrid. https:// porcausa.org/wp-content/uploads/2020/07/RetratodelairregularidadporCausa.pdf

Fernandez, V. (2020). Andalousie : Esclavage moderne au sein du « potager de l'Europe ».

Rapports de Force. L'info pour les mouvements sociaux. Retrieved from https://rapportsdeforce.fr/linternationale/andalousie-esclavage-moderne-au-sein-du-potager-de-leurope-0618752

Filhol, R. (2013). Les travailleurs agricoles migrants en Italie du Sud. *Hommes & migrations*, (1301), 139-147. https://doi.org/10.4000/hommesmigrations.1932

FitzSimmons, M. (1986). The New Industrial Agriculture: The Regional Integration of Specialty Crop Production. *Economic Geography*, 62(4), 334-353. https://doi.org/10.2307/143829

Foresti, M. (2020). Future Development. Less gratitude, please. How COVID-19 reveals the need for migration reform. Brookings. Retrieved from https://www.brookings.edu/blog/future-development/2020/05/22/less-gratitude-please-how-covid-19-reveals-the-need-for-migration-reform/

Garcés Mascareñas, B., & Güell, B. (2021). Temporeros agrícolas en España: nuevas caras de un viejo problema. In J. Arango, B. Garcés Mascareñas, R. Mahía, & D. Moya (Eds.), «Inmigración en tiempos de Covid-19». *Anuario CIDOB de la Inmigración 2020* (pp.86-100). Barcelona: Cidob. https://doi. org/10.24241/AnuarioCIDOBInmi.2020.86

Garrapa, A. M. (2018). Supermarket revolution y agricultura californiana: ¿un modelo en expansión? Interdisciplina, 6(14), 155-176. https:// www.scielo.org.mx/scielo.php?script=sci_arttext&pid=S2448-57052018000100155&lng=es &nrm=iso

Gellen, S. & Lowe, R.D. (2020). (Re)constructing social hierarchies: a critical discourse analysis of an international charity's visual appeals. *Critical Discourse Studies*, 18(2), (pp.280-300). https://doi. org/10.1080/17405904.2019.1708762

Gómez, D. (2020, November 9). Huelga en el campo el 4 de diciembre por las condiciones «míseras» de trabajo. *La Verdad*. Retrieved from https://www. laverdad.es/murcia/campo-huelga-diciembre-20201109130657-nt.html

Horowitz, J. (2020). For Some Italians, the Future of Work Looks Like the Past. *The New York Times*. Retrieved from https://www.nytimes. com/2020/05/24/world/europe/italy-farms-coronavirus.html

IDOS (2020), *Dossier statistico immigrazione 2020*. Roma, Italia: IDOS.

Il Fatto Quotidiano (2020). Lavoratori stranieri, giovedì 21 maggio sciopero dei braccianti contro il dl Rilancio. Il sindacalista Soumahoro: 'Non comprate frutta e verdura'. *Il Fatto Quotidiano*. Retrieved from https://www.ilfattoquotidiano. it/2020/05/20/lavoratori-stranieri-giovedi-21-lo-sciopero-dei-braccianti-contro-dl-rilancio-il-sindacalista-soumahoro-non-comprate-frutta-e-verdura/5808134/

INEA (2014). Indagine sull'impiego degli immigrati in agricoltura in Italia. 2012. Roma: INEA. Retrieved from https://www.crea.gov. it/documents/68457/0/indagine+sull%27im pie go+degli+immigrati+in+agricoltura+in+i talia+2012.pdf/d684ab6c-4c08-3e39-060885c21796 b8f0?t=1562654938663

ISFOL (2014). Il lavoro sommerso e Irregolare degli stranieri in Italia. Roma: ISFOL. Retrieved from https:// oa.inapp.org/bitstream/handle/20.500.12916/1772/ Ficco_Iadevaia_Pomponi_Tagliaferro_Lavoro%20 stranieri.pdf?sequence=2&isAllowed=y

ISMEA (2020a). Sintesi della congiuntura agroalimentare. II trimestre 2020 - Speciale Covid-19". Report – AgriMercati. Roma: Ismea. Retrieved from http://www.ismeamercati.it/flex/cm/pages/ ServeBLOB.php/L/IT/IDPagina/10835

ISMEA (2020b). Agrimercati. La congiuntura agroalimentare del III trimestre, le anticipazioni e le prospettive. Roma: Ismea. Retrieved from http:// www.ismeamercati.it/flex/cm/pages/ ServeBLOB. php/L/IT/IDPagina/11130

ISTAT (2021). Stima preliminare dei conti economici dell'agricoltura. Roma: Istat. Retrieved from https://www.istat.it/it/files//2021/01/Report-Stima-preliminare-agricoltura-2020.pdf

ISTAT (2020). Il mercato del lavoro 2020. Verso una lettura integrata. Roma: Istat. Retrieved from https://www.istat.it/it/files//2021/02/Il-Mercato-del-lavoro-2020-1.pdf

Johnson, J.R. (1939). The Revolution and the Negro. *New International*. 5(December 1939), pp. 339-343.

Landero, J. (2020). El campo onubense busca alternativas a la mano de obra marroquí en Ucrania, Honduras, Ecuador, Bulgaria o Rumanía. *Huelva Información*. Retrieved from https://www.huelvainformacion.es/provincia/campo-alternativasmano-obra-marroqui-Huelva_0_1511249103.html

López-Sala, A. (2016). Induced circularity for selective workers. The case of seasonal labor mobility schemes in the spanish agriculture. *Arbor*, 192(777), 1-12. https://doi.org/10.3989/arbor.2016.777n1003

MacPherson, T. (2020). Even in times of COVID, we are still biting the hands that feed us. *Picum*. Retrieved from https://picum.org/agricultural-workers-in-times-of-covid-19/

Macrì, M.C. (2019). Il contributo dei lavoratori stranieri all'agricoltura italiana, Centro di ricerca Politiche e Bio-economia-Crea: Roma.

Martín, M.and Saiz, E. (2020). El virus frena la llegada de temporeras marroquíes y pone en riesgo la campaña de la fresa. El País. Retrieved from https://elpais.com/economia/2020-03-17/el-virus-frena-la-llegada-de-temporeras-marroquies-y-pone-en-riesgo-la-campana-de-la-fresa.html.

Márquez Domínguez, J. A. and Gordo Márquez, M. (2014). Alternativas al contingente de temporada: otras estrategias empresariales para el abastecimiento de mano de obra agrícola. In J. A. Márquez Domínguez (Ed.), *Jornaleros extranjeros en España. El contingente agrícola de temporada como política de control de los flujos migratorios*. (pp.305-336). Universidad de Huelva.

Marx, K. (1971 [1863]). *Theories of Surplus Value*, Part 3, trans. Cohen J, Ryazanskaya SW. Moscow: Progress Publishers.

Mata Romeu, A. (2018). La glocalización y sus consecuencias: apuntes sobre los temporeros en la fruticultura leridana. *Barataria*, 24, 209-224. https://doi.org/10.20932/barataria.v0i24.412

Ministerio de Sanidad (2021). Guía para la prevención y control de la COVID-19 en las explotaciones agrícolas que vayan a contratar personal temporero. Madrid: MSCBS. Retrieved from https:// www.mscbs.gob.es/profesionales/saludPublica/ccayes/alertasActual/nCov/documentos/Recomendaciones_Temporeros.pdf

Ministerio de Trabajo y Economía Social (2020). Lista de actividades esenciales. Madrid: MITES. Retrieved from https://www.mites.gob.es/ficheros/ministerio/contacto_ministerio/lista_actividades_esenciales.pdf

Misuraca, L. (2020). Sos agricoltura, se non si trovano 400 mila braccianti, presto scaffali vuoti. Il salvagente. Retrieved from https://ilsalvagente. it/2020/04/08/sos-agricoltura-se-non-si-trovano-400-mila-braccianti-presto-scaffali-vuoti

Molinero-Gerbeau, Y. (2021a). The Problem is not Covid-19, it's the Model! Industrial Agriculture and Migrant Farm Labour in the EU. *Eurochoices*, Online first. https://doi.org/10.1111/1746692X.12308

Molinero-Gerbeau, Y. (2021b). De complementarios a indispensables. Trabajadores rumanos en los enclaves de producción estacional de Huelva y Lleida. In S. Marcu (Ed.), *Transformaciones y retos de la movilidad de los europeos del este en España, treinta años después de la caída del muro de Berlín*: 1989-2019 (pp.239-260). Tirant Lo Blanch.

Molinero-Gerbeau, Y. (2020a). La creciente dependencia de mano de obra migrante para tareas agrícolas en el centro global. Una perspectiva comparada. *Estudios Geográficos*, 81(288), 1-27. https://doi.org/10.3989/estgeogr.202046.026（=2023, 上野貴彦訳「グローバルな「中核」での農業における移住労働への依存増大――米州・欧州・アジア太平洋地域の国際比較から」『都留文科大学研究紀要』97: 227-255.）

Molinero-Gerbeau, Y. (2020b). Dos décadas desplazando trabajadores extranjeros al campo español: una revisión del mecanismo de contratación en origen. *Panorama Social*, 31, 141-153.

Molinero-Gerbeau, Y., & Avallone, G. (2018). Migration and Labour Force needs in contemporary agriculture: what drives states to implement temporary programs? A comparison among the cases of Huelva, Lleida (Spain) and Piana del Sele (Italy). *Calitatea Vieții*, 29(1), 3-22.

Molinero-Gerbeau, Y., & Avallone, G. (2016). Producing Cheap Food and Labour: Migrations and Agriculture in the Capitalistic World-Ecology. *Social Change Review*, 14(2), 121-148. https://doi. org/10.1515/scr-2016-0025

Moore, J. W. (2010). The End of the Road? Agricultural Revolutions in the Capitalist World-Ecology, 1450-2010. *Journal of Agrarian Change*, 10(3), 389-413. https://doi.org/10.1111/j.14710366.2010.00276.x

Morice, A. (2001). "Choisis, contrôlés, placés" – renouveau de l'utilitarisme migratoire. *Vacarme*, 14, 56-60.

Omizzolo, M. (2020), Sfruttamento, caporalato e lavoratori migranti in agricoltura al tempo del Covid-19. En IDOS (Ed.), *Dossier statistico immigrazione 2020* (288-292). Roma, Italia: IDOS.

Pécoud, A. (2020). Agriculture: les migrants saisonniers récoltent ce que le Covid-19 a semé. *The Conversation*. Retrieved from https://theconversation.com/agriculture-les-migrants-saisonniers- recoltent-ce-que-le-covid-19-a-seme-140116

Pedreño Cánovas, A. (2020). Un momento durkheimiano y un momento marxiano en la crisis sanitaria de la COVID-19. *Trabajo y Sociedad*, 21(35).

Pedreño Cánovas, A. (1998). *Del jornalero agrícola al obrero de las factorías vegetales. Estrategias*

familiares y nomadismo laboral en la sociedad murciana (doctoral thesis). Universidad de Murcia: Murcia

Pietrogiovanni, V. (2020). Labour Without Law: Migrant Food Workers in Italy. *Futures of Work*. Retrieved from https://futuresofwork. co.uk/2020/07/13/labour-without-law-migrant-food-workers-in-italy/

Poenaru, F., & Rogozanu, C. (2020). Why Social Distancing "Doesn't Apply" to Germany's Migrant Farmworkers. *Jacobin*. Retrived from https://jacobinmag.com/2020/05/romanian-migrant-farm-workers-germany-european-union-coronavirus

Ramírez Melgarejo, A. (2020). Cuestión meridional, desigualdad y trabajo invisible: Cuando un virus hace emerger las debilidades productivas de un país del sur de Europa. *Trabajo y Sociedad*, 21(35).

Redattore sociale (2020). Braccianti, così il coronavirus ha peggiorato le condizioni di vita e di sfruttamento a Rosarno. *Redattore sociale*. Retrieved from https://www.redattoresociale.it/article/notiziario/braccianti_cosi_la_pandemia_ha_peggiorato_ le_condizioni_di_vita_e_di_sfruttamento_a_rosarno.

Regalia, M. (2020). L'opinione dei testimoni privilegiati sull'ultima regolarizzazione. Milan: Ismu. Retrieved from https://www.ismu.org/lopinione-dei-testimoni-privilegiati-sull-ultima-regolarizzazione/

Ruiz Andrés, R., & Sajir, Z. (2021). Desinformación e islamofobia en tiempos de "infodemia". Un análisis sociológico desde España. *Revista Internacional de Sociología* (*RIS*), 79(4) .

Rye, J. F., & Scott, S. (2018). International Labour Migration and Food Production in Rural Europe:A Review of the Evidence. *Sociologia Ruralis*, 58(4), 928-952. https://doi.org/10.1111/soru.12208

Sajir, Z. (2021). Acuerdos comerciales, migratorios, de seguridad y de empleo centro-periferia. Un análisis de ecología-mundo. *Relaciones Internacionales*, n.47, 201-216. https://doi.org/10.15366/relacionesinternacionales2021.47.010

Sajir, Z., & Ruiz Andrés, R. (2020). A socio-historical analysis of the 2020 corona pandemic:between old and new virtues and vices. *Dialoghi Mediterranei*, n. 43. http://www.istitutoeuroarabo.it/DM/a-socio-historical-analysis-of-the-2020-corona-pandemic-between-old-and-new-virtues-and- vices/

Sayad, A. (2007). *L'immigrazione o i paradossi dell'alterità. L'illusione del provvisorio*. Ombre corte: Verona.

Shachar, A. (2020). Beyond open and closed borders: the grand transformation of citizenship. *Jurisprudence*, 11 (1), 1-27. https://doi.org/10.1080/20403313.2020.1788283

Secretariat of State for Global Spain (2020). Agriculture, Livestock and Fishing: Heroes Against the Coronavirus. This Is The Real Spain.

Tagliacozzo, S., Pisacane, L. and Kilkey, M. (2021). The interplay between structural and systemic vulnerability during the COVID-19 pandemic: migrant agricultural workers in informal settlements in Southern Italy. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 47(9), pp.1903-1921 https://doi.org/10.1080/1369183X.2020.1857230

United Nations (2020). Spain: Passing the buck on exploited migrant workers must end, says UN expert. United Nations Human Rights. Office of the High Commissioner. Retrieved from https://www. ohchr.org/en/NewsEvents/Pages/DisplayNews. aspx?NewsID=26007&LangID=E

van Dijk, T. A. (2015). Critical Discourse Analysis. D. Tannen, H.E. Hamilton, D. Schiffrin(Eds.), In *The Handbook of Discourse Analysis* (pp.466-485). Oxford: Wiley Blackwell https://doi.org/10.1002/9781118584194

#RegularizaciónYa (2020). Proposición No de Ley. Madrid: #RegularizaciónYa. Retrieved from https:// worldjusticeproject.org/sites/default/files/documents/Proposal%20not%20of%20law%20in%20 the%20Spanish%20Congress%20%28%23RegularizacionYa%29.pdf

訳者解題ならびに訳注の参考文献（本文参考文献と重複するものは省略）

Abril, G. & Spottorno, C. (2017). *La Grieta*, Astiberri.（＝2019, 上野貴彦訳『亀裂――欧州国境と難民』花伝社.）

飯田悠哉（2021）.「パンデミック下の外国人農業労働者――「あまり変わらない」と語るのはなぜか」『村落社会研究』28(1): 54-56.

Corrado, A. (2017). Agrarian change and migrations in the Mediterranean from a food regime perspective. In A. Corrado, C. Castro, D. Perraotta(Eds.), *Migration and Agriculture: Mobility and change in the Mediterranean area*（pp.311-331). New York: Routledge.

Marx, K. (1863). Theorien über den Mehrwert : aus dem nachgelassenen Manuskript “Zur Kritik der politischen Ökonomie”（＝1963-66, 大島清・時永淑訳『剰余価値学説史　第 3 分冊』国民文庫『マルクス・エンゲルス全集』第26巻Ⅲ, 大月書店.）

Molinero-Gerbeau, Y., & Avallone, G. (2020). El trabajo ambulante: entre derecho a la ciudad y represión: El caso de la resistencia de los trabajadores senegaleses en la ciudad de Salerno, *Migraciones* 48: 21-50.

Sajir, Z. (2020). Il “marocchino” che non è marocchino: un linguaggio che conviene. Il caso dei lavoratori migranti ambulanti in Italia. In G. Avallone & D. Niang (Eds.), *Vivere non è un reato. Lavoro ambulante, socialità e diritto alla città*. Ombre Corte.

Sanderson, M. (2012). Migrants in the World Food System: Introduction. *International Journal of Sociology of Agriculture and Food* 19(1): 56-61.

酒井隆史（2021）.「「エッセンシャル・ワークの逆説」を超えて――「ブルシット・ジョブ」、ケア、再生産労働」『生活経済政策』296: 8-12.

上野貴彦（2020）.「スペイン：移住労働者とCOVID-19――「エッセンシャルワーカーのジレンマ」のなかで」宇佐見耕一・岡伸一・金子光一・小谷眞男・後藤玲子・原島博［編著］『世界の社会福祉年鑑2020〈2021年度版〉』旬報社.

Received：September , 8, 2023
Accepted：November, 1, 2023